

# 「日本の現場発看護学」の構築を目指した事例研究方法の開発 第2報：質的研究方法の関連と科学性の検討

## 看護学研究者として 事例研究に取り組んでみて

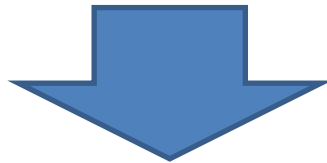
東京大学大学院  
高齢者在宅長期ケア看護学/緩和ケア看護学

野口麻衣子

1. 取り組みの動機
2. 取り組みの実際
3. 事例研究に取り組んで感じたこと
4. 事例研究を進める上で大事だと思うこと

# 1. 取り組みの動機

- 訪問看護って何してくれるの？  
→あいまいな答えになってしまった
- 看護の効果を測定したい  
→何が看護の効果と言えるのか悩んだ



看護学の発展のためには、  
まずは**看護実践の蓄積**が必要

## 2. 取り組みの実際①

2016年	内容
7月初旬	・ 研究者の看取りに関する研究の協力者として出会った「A氏のことを振り返りたい。いい看取りだったんだけど、自分のケアがよかったのだろうか？」
7月下旬	・ 事例の経過表（約6年）に書き起こした ・ なぜA氏への看護実践を振り返りたいと思ったのか、について話し合った
8月～10月	・ 最期の1カ月について、ワークシートにまとめてもらい、再度語り合い×5回 → 結果の表を作り上げた
11月	・ 学内の研究会（Long-term care quality研究会）で発表
12月	・ 看護系教員2名と本人で語り合い。 →もやもやが消えないため、ご遺族に話を聞いてくることに

## 2. 取り組みの実際①

2016年	内容
7月初旬	・ 研究者の看取りに関する研究の協力者として出会った「A氏のことを振り返りたい。これでよかったのだろうか？」
7月下旬	・ 対象者について、事例の経過表（約6年）に書き起こした ・ なぜA氏への看護実践を振り返りたいと思ったのか、について話し合った
8月～10月	・ 最期の1カ月について、 <b>ワークシート</b> にまとめてもらい、再度語り合い×5回
11月	・ 学内の研究会（Long-term care quality研究会）で <b>発表</b>
12月	・ 看護系教員2名と本人で語り合い。 →もやもやが消えないため、ご遺族に話を聞いてくることに

## 2. 取り組みの実際①

2016年	内容
7月初旬	・ 研究者の看取りに関する研究の協力者として出会った「A氏のことを振り返りたい。これでよかったのだろうか？」
7月下旬	・ 対象者について、事例の経過表（約6年）に書き起こした ・ なぜA氏への看護実践を振り返りたいと思ったのか、について話し合った
8月～10月	・ 最期の1カ月について、ワークシートにまとめてもらい、再度語り合い×5回 → 結果の表を作り上げた
11月	・ <b>結果の表</b> を作り上げた ・ 学内の研究会（Long-term care quality研究会）で <b>発表</b>
12月	・ 看護系教員2名と本人で語り合い。 →もやもやが消えないため、ご遺族に話を聞いてくることに

## 2. 取り組みの実際①

2016年	内容
7月初旬	・ 研究者の看取りに関する研究の協力者として出会った「A氏のことを振り返りたい。これでよかったのだろうか？」
7月下旬	・ 対象者について、事例の経過表（約6年）に書き起こした ・ なぜA氏への看護実践を振り返りたいと思ったのか、について話し合った
8月～10月	・ 最期の1カ月について、ワークシートにまとめてもらい、再度語り合い×5回 → 結果の表を作り上げた
11月	・ 学内の研究会（Long-term care quality研究会）で発表
12月	・ 看護系教員2名と本人で語り合い。 →もやもやが消えないため、ご遺族に話を聞いてくることに

## 2. 取り組みの実際②

2017年	内容
2月	看護研究者4名、訪問看護師2名、大学院生2名で集まり、 <b>事例について検討会</b> →A氏の意向を共有したことで、家族それぞれがA氏に思いを馳せて、 <b>A氏が看取りの中心</b> に登場
3月	<b>学会発表用の抄録作成</b> を開始 話し合いにより、発表学会変更のため延期
4月	<b>論文執筆</b> を少しずつ始める
5月	<b>論文初校</b> が完成
6月	学会発表用の抄録を登録 論文の初稿が完成（8月末の投稿を目指す目標をたてた） お互いに <b>〆切を宣言しながら論文の加筆修正</b> のやり取り
7月～9月	約 <b>1～2週間の〆切</b> をたてて、論文の加筆修正を繰り返す
10月	2人で投稿の最終チェック、書類の準備 → <b>投稿</b> → <b>祝杯</b>



# 3. 事例研究に取り組んで感じたこと

楽しい！

看護実践者との二人三脚

研究者自身の  
活動の幅が広がる

看護実践者が自信を  
得ていく過程を支援できる

看護実践を言語化/可視化  
出来た実感を得る

日々に埋もれていた  
看護実践が蓄積されていく

看護が何をしているのか、  
看護の効果を何で測るのか、  
が見えてくるかもしれない

看護学発展への  
寄与の可能性

- 直接会って「語り合う」と「問われ語り」が始まる
  - ・ 近くにいることが最大のメリット
  - ・ 大学の近くにいる看護実践者と一緒に取り組む方が良い
- 看護実践者との語り合う時間をとにかく楽しむ
- 素晴らしい看護実践だと思ったら、素直に言葉にして伝える  
→安全な場で「問われ語り」が進んでいく
- 質的研究の経験/理解を最大限生かす
  - ・ 私の場合は、Grounded theory approachの質的研究
- 事例研究論文を書くときの留意点
  - ・ 方法を丁寧に詳細に記述する
  - ・ 結果は、看護実践者の記述を尊重する
  - ・ 緒言・考察は研究らしく

### ■ 看護実践者の上司の理解

### ■ 看護実践者と看護研究者のコラボレーション

- ・ 看護実践者：生き活きとした結果の記述
  - ・ 看護研究者：緒言・考察のロジック、論文執筆の経験/  
テクニック
- 一緒に取り組むことで、初めて論文が完成する

Double first author（共同第一著者）